

君の名は

第2部 結婚の幸福

セウ 田一丈 著

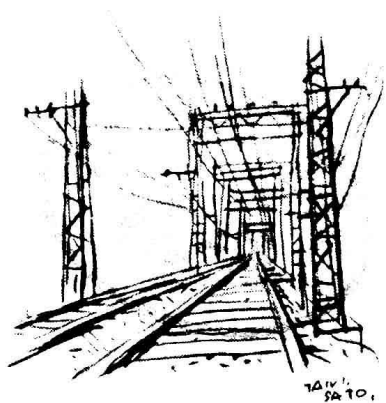


NHK連続放送劇

NHKラジオ新聞連載

君の名は

菊田一夫



寶文館版

君の名は…

第2部

180 円

地方
定価 187 円

昭和二十八年四月五日 第一刷発行
昭和二十八年七月一日 第十三刷発行

著 者

菊 田 一 夫
きくた いち ぶ

発行者

東京都千代田區神田錦町三ノ二〇
株式 会社 宝 文 館
代表者 大 葉 久 治

印刷者

東京都新宿區山吹町三二
早 坂 善 太 郎

発 行 所

東京都千代田區 株式 会社 宝 文 館
神田錦町三ノ二〇
電話・神田三一四九 振替・東京二八、番

落丁本・乱丁本は
お取替いたします

三恵社印刷・大光堂製本

君の名は……

第2部 結婚の幸福

目次

佐渡の昼顔(第1部の梗概)……………	一
* 妻の疑問……………	七
キティ颱風……………	二三
* 昨日の道……………	二八
青い眼……………	三五
* 青い眼(続)……………	三八

クリスマス・イヴ……………	三七
* 陽だまり……………	四〇
帰航……………	四三
悪夢……………	四四
敗北……………	四七
* 帰港……………	四九
流れる花……………	五三

深	測		五七
新	課		六三
な	まめかしき闘入者		六五
嫉	妬		七三
疑	惑		七四
み	じめな良人		七九
み	じめな良人 (続)		八四
終	電 車		九〇
夜	の 女		九四
夜	の 女 (続)		九七
年	賀 状		一〇三

加	瀬田修造の一家		一〇九
修	造の帰京		一一一
木	枯しの街		一二六
木	枯しの街		一二六
木	枯しの街 (続)		一三〇
醉	客の世間話		一三三
一	蓮托生		一三五
義	憤		一三一
雪	のたより		一三五
雪	の 路		一三七
雪	の 路 (続)		一四二
誠	実		一四四

オペラ見物	一四七
梢の縁談	一五三
＊	
梢の縁談(続)	一五五
妻という立場	一六一
＊	
冬のボート	一六六
御母堂様	一七二
＊	
真知子の失踪	一七八
深夜の訪問客	一八二
駅の待合室	一八五
佐渡は吹雪	一九〇
＊	
奈美の死	一九三

浜木棉の葉の蔭に	一九五
別れるべきか	一九九
＊	
別れるべきか(続)	二〇三
女の悲しみ	二一〇
＊	
青いエントツ	二一五
愚かなる悲劇	二二二
＊	
恋のために	二三三
夜の舗道	二三四
悲しき反撥	二三八
遺書	二四四
夕暮の来客	二五八
＊	

断崖	二四一
古木の聲	二四二

生きるための鞭	二四七
夕闇	二四九

装幀 佐藤 泰 治

佐渡の晝顔

——此の篇から読む人のために

昭和二十年十一月二十四日夜八時……それは、氏家真知子うじけまちこが、或る名も知らぬ青年との約束を果たすために、数寄屋橋すきやばしの橋畔へいかなくはならない時刻であつた。

真知子は、そのちようど半年前の五月二十四日、あの東京夜間大空襲のあつた夜……その橋の上で、一人の見知らぬ青年に命を救われた。いや、真知子だけが救われたのでなく、あるいはその青年も真知子に救われたのだ、と云えるかも知れない。二人は燃え盛る火炎の中で、互に助け合い、そして、やつと命を完了したのであつた。

二十五日の朝、まだ余煙がいがらつぱく街にただよつている中で見知らぬ同士の二人は別れようとした。その時、青年は真知子にきいた。

「君の名は……」

しかし、真知子は答えなかつた。命を救つてくれた相手に感謝しながらも、若い女の異性に対する警戒心はなぜか解くことができなかったのだ。

青年もまた、ためらつてゐる真知子をみて、強いて名をきこうとはしなかつた。

「互に知らない同士で別れたほうがいいかも知れない……だが、もしも、それまで生命があつたらね、半年後に……そう十一月二十四日の夜だ……此の橋の上で、もう一度会おうじゃないか……」

約束を胸に、真知子は青年と別れて我が家へ帰つたが、焼けただれた街に我が家は跡形もなく、行きはぐれた両親は、その夜半、生命を失つてゐた。

真知子は、その人を知らず、名もきかずに別れた青年が何故か氣になつた。十一月二十四日夜八時……その日を、持ちかねた。だが、佐渡の相川町に住んでいる伯父の勘次が、焼跡の防空壕住いをしてゐる真知子を引きとりにきたのは、その二日前の二十二日だつた。

真知子は、二十四日の夜がすぎるまでと嘆願したが、相川町で漁業問屋をやつてゐる勘次には、その暇はなかつたし、佐渡に住み慣れて戦火の恐怖を知らず、しかも年老いて頑固な彼には、空襲下の特異な事情の下で生まれた真知子の切ない愛情を理解することが出来なかつた。そればかりか、彼は、

「そんなバカ氣た約束をさせるような奴は、お前を誘惑しようとしてゐる不良だ」

と、断じて、そのまま真知子を北国に連れ歸つたのである。

佐渡へ渡つた真知子は、心をひかれながらも、その名も知らぬ相手には、たよりを出す術がなかつた。

そしてめぐり來つた昭和二十年十一月二十四日……この夜、後宮春樹^{あとみや はるき}は、約束通りに数寄橋々畔に佇ずんだ。しかし、時刻はすぎても、あの時の若い女が、どうして目の前に現れるはずがあらうか……

彼が知り会つたのは、若い女とはおおよそゆかりのない、復員して妻子の行方を探し求めているうちに遂に

浮浪者となり果ててしまつた、元陸軍少將加瀬田修造という老人だつた。

加瀬田修造は数寄屋橋の上で行き倒れているところをパンパンの棺に一片のパンを与えられ、その恩義を感じて、いまは棺の友達のアさと三人で、掘立小舎暮しをしていた。そして、彼を救つてくれた棺はというと、もうアメリカに帰つたきり何の音沙汰もないG Iとの混血児を生んで育てているのだつた。

棺は、修造や彼女等の為にやさしい手をのばしてくれる春樹をしたつた。しかし、夜の女であつた棺にとつては、春樹は神のように潔からで近づき難い……

彼女は、生れ出た眼の青い子供に「俊樹」と名をつけることによつて、春樹に対する淡い慕情の、せめてもの慰さめとした。

一方、佐渡へ帰つた真知子は、小木港の料理屋の娘だという綾と知り会つた。綾は真知子の口から名も知らぬ恋人の話をきいて、

「いい話だねえ」

美しいとは思ひながらも、真知子のあどけなさを笑つて、

「何とかしてお探しよ、その人を……恋なんてものは、唯ひとりで悲しがつていたつて、どうにも恰好のつかないものだからね」

真知子に、君の名は……と、たずねた相手を揆す方法を教える。

その頃、相川町に帰省していた浜口勝則という青年は、伯父の勘次の遠縁の者で、東京の某省で官吏をつとめているのだが、彼は勘次のすすめ真知子に会つて以来、結婚の決心をする。

だが、そのとき真知子は、数寄屋橋畔で約束をした青年の名が、後宮春樹であることを知つたばかりだった。あとは後宮春樹の居処をつきとめれば、それでいい……。

「じやあ僕も一緒に、その青年を探しに行こうじやありませんか……僕は真知子さんの美しい夢を実現させてあげたいのだ」

勝則はそんないいかたをした。

真知子と勝則、若い二人は旅に立つた。行く先は、三重県の志摩半島にある海女の町和具。

綾の紹介で会つた本間定彦^{ほんまをさだひこ}という佐渡の詩人のいうことには、後宮春樹という青年の居処は、定彦と詩人仲間のつきあいをしている和具の水沢謙吾^{みずさわけんご}が知つている筈……。

勝則と真知子は和具で水沢謙吾に会つた。その町は後宮春樹の故郷で、謙吾は春樹の幼友達だった。

同じ志摩半島の浜島には春樹の姉の悠起枝^{ゆきえ}がいた。

悠起枝と謙吾は初恋の間柄であつたが、悠起枝が西崎という家に嫁いでゆき、良人が戦死して未亡人となつたとき、二人はその初恋を契らせて結婚しようとしたが、謙吾の周囲の者は、殊に母のしのは、戦争未亡人である悠起枝の立場を憚つて……かつては謙吾の教え子であつた戸村奈美^{とむらなみ}という海女との結婚を強いた。

奈美はどこか精神的に異状があるのではないかと思われるほど、あらゆる衝動に敏感な女だった。彼女は幼ない頃からしつていた謙吾の愛人、悠起枝を敵視した。悠起枝が和具にいられなくなつて浜島へいき、「松木」という料亭で働かなくてはならなくなつたのも、奈美のふりまいた噂の為だったかも知れない。

真知子は勝則につれられて「松木」の離れ座敷で悠起枝に会つたとき……

「あなたは私の弟の春樹を、そんなに愛していraftしやるのですか」

悠起校にきかれた。

「愛しているというのではなく……いえ、私には、よく判らないのです、自分の氣持が……とにかく一度お目にかかりたくて……」

真知子が答える。

「ロマンチックな夢……美しいと思いますけどね……だけど果して春樹に会つて、たとえば恋をして結婚したとしても……男つて、それはどこにまでつきつめて考えていい相手かしら……」

悠起校は謙吾と奈美が結婚し、戦争未亡人であるという為に彼女一人がこうして料亭の女中をしていなくてはならないその運命に……或は世間の古いしきたりにはげしい憤りを感じていた。だから、そんな忠告を真知子に与えたのだつた。

「春樹は私の弟ですけどね……でも、春樹もやつぱり男ですから……結婚は、自分の眼で見た相手とでさえよく失敗するんですものね」

真知子はこうして旅から旅と一緒に廻つてくれる勝則の親切さに……これ以上は、もうどうにも耐え切れない重荷を感じていた。

唯一夜、空襲の中で語り合つた後宮春樹、もういまでは彼女の胸の中で、あまりにも美しく理想的な像として作りあげられてしまつてゐる後宮春樹に、いまさらになつて会うのが恐しかった。生れてから恋をしたことのない真知子には、恋そのものが恐しかった。

真知子は遂に、和具の浜辺で勝則に唇を許し、結婚を承諾したのである。

結婚式は、昭和二十一年十一月二十五日……。

半年目毎に数寄屋橋々畔で会おうと約束をした、その一言を後宮春樹がもしも守っているなら……彼はこの式の前夜、十一月二十四日の夜も、橋の上に佇ずんで真知子を待つていた。

結婚の前夜、真知子は伯母の信枝の許しを得て数寄屋橋へいつた。

春樹はいた。

真知子は春樹に云つた。

「おなつかしゅうございます」

同じ気持で進みよつて来ようとする春樹に、真知子は悲しい心を押さえていつた。

「でも、あれ以来、これがはじめてで、そして最後の御挨拶になるのが悲しゅうございます……」

「なぜ、そんなことを……」春樹は、おどろいて云つた。

「真知子は……結婚するのでございます」

悲しい夜……数寄屋橋に秋の夜霧が白い煙のように流れていた。

妻の疑問

結婚二年目。真知子はこの頃よく考え込むことがある。

良人の勝則の性格に就いてである。その揚句いつも呟く言葉は、

——世の中の多くの良人達に比べたら、きつと、勝則はいい良人であるにちがいない。

真知子は、そういつて自分の頭のなかに湧き起つたいろんな疑問をふりほどくことにしている。

娘時代に恋愛というものを殆んど経験したことのない真知子は……後宮春樹との恋愛は、彼女の娘時代に於ける唯一度のものだった。これだけは、真知子にとつては終生に唯一度の、しかも永遠に忘れられない印象の強いものであっただろう。彼女は、その春樹との恋愛そのものに恐しさを感じて、それから逃れるようにして、伯父のすすめてく

れる浜口勝則との結婚生活に入つたのであつた……真知子は、だから、男というものをよくは知らない。

——きつと勝則は、いい良人にちがいない。

真知子は、そう思うより他には仕方がないのである。

真知子の第一の疑問は、なぜ良人というものは、自分以外の人間とは……男に限らず、女まで……まじわることを禁じようとするのであろうか、と、いうところにあつた。

男とのまじわりを禁止する気持は判らないでもない。だが女同士のまじわりまで禁じようとする勝則の心の狭さが不満だった。

第二の疑問は、結婚以前には、あんなに親切で、しかも真知子にかかり合うことだけが人生のすべてでもあるかのようにふるまっていた勝則が、結婚後は、なにか自分を無視して、勤め先の上役の機嫌を損じまいとしたり、仕事にばかり没頭して役所での地位の昇進を焦せるのであろうかという疑問……それに勝則は「母さん子」で育つてきたのだ、というけれど、それにしても浜口家の家事一切を切り

まわしているのは、勝則の母の徳枝。真知子は彼女が嫌いである以前から此の家に奉公している女中の清やとともに徳枝の指図によつて動いているだけで、たとえば彼女の着る衣類の色柄までが徳枝の意見によつて左右され、真知子が時として彼女自身の好みを通そうと思つても、勝則は母の意思にしたがつて真知子の好みを封じてしまう。

——まるで清やにお仕着せを買つてやるみたいね。

或る時、真知子が思わず愚痴をこぼしたら、それを母の徳枝がききとがめ、勝則に伝えられて、その夜は早速母と息子二人から、茶の間で小一時間にもわたつて、訓された。

第一の疑問を真知子が感じたのは、勝則と二人で新婚旅行にいった水上温泉のこと。つまり真知子は結婚第一日にして、良人の勝則の性格に疑問を持たされ、微かな失望を感じさせられたのであつた。

夫婦の乗つた列車が水上駅に到着したとき、そのホームで二人は、スーツケースを片手に提げたひさご家の綾に

ばつたりと出会つた。

綾は彼女らしい気まぐれを起して、佐渡から上京の途上だつた。

「ちよつと温泉にはいつていこうかなと思つたんでね、此処で途中下車したんだよ。一日遊んでね、いま上野行を待つてるところなんだ」

綾は云つた。

「おや、その人が真知坊の旦那様なのかい」

綾がおどろいたような顔をするので、

「御紹介します。この方佐渡の小木の方で……ひさご家というお料理屋さんのお嬢さんなんです。お綾さん」

真知子に紹介されて勝則は、

「浜口です、はじめまして……」

すると綾は、

「あなた、一度お目にかかったことがありますね」

勝則も綾をみて、どこかで会つたことのある顔だと思つたが、

「そうでしたかねえ」

綾は急にけらけらと笑いだして、

「真知坊、心配しなくて大丈夫だよ……この人とは汽車の中で会ったんだよ……この前に東京に出た時にね、その帰りだ……汽車の中でこの人に、私、マッチか何か借りたことがあるんだよ……あんた覚えていらつしやる」

「あ、あのときのね」

「真知坊、大丈夫だよ、この人とあたしと、別に浮気をして知り合つた仲じやないんだから……なかなか紳士だつたよ、あの時は……」

真知子は綾のいつもながら飾り気のない、づけづけとした物の言い方がおかしくてクスクスと笑つたが、

「真知子……行こうか……宿の番頭が待ちかねてる」

勝則はこの得体の知れない柄の悪そうな女と、こんな旅行先の駅でいつまでも話しているのは煩わしかった。彼はまだ綾と話したがっている真知子を急ぎ立てて、綾をそこに置き去りにした。

新婚旅行の第一夜があけた翌朝、湯から出た勝則が町を

散歩している間に化粧をすませた真知子が、宿のホールで

ピアノを弾いていると、やがて戻つてきた勝則は、

「散歩しながら考えてきたんだがね」

と言つて、こんなことを真知子に訓した。

「僕は昨夜、駅のプラットフォーム・ホームで佐渡の人に会つたね……綾さんとかつていう女性だ」

「ええ、会いました」

真知子は昨夜の駅での勝則の態度や、いまの口ぶりからみて、勝則が何を言おうとしているか、ほぼ察しられたので、急いで言葉をつけ足した。

「あの人面白い人でしよう。お料理屋さんの娘さんですから、口のききかたや言葉遣いは、少しぞんざいなところがありますけど……でも、とてもいい人なんですのよ」

「悪い人じやないことは僕にもよく判つている……あの人も言つてたように、僕も一度この前佐渡へいったときだ……あの列車の中で会つたことがある……と、いつでもマッ

チを借りたか、貸したかしただけのことなんだがね……よく顔を覚えていたものだと思うよ。きつと客商売をやっている人だから、そういう点では特殊な記憶力を持つているんだらう……もちろん悪い人じゃないと思う」

勝則は真知子に機先を制せられた形で、いくらかてれくさい顔をしたが、

「だがね、真知子……僕は役所につとめている人間なんだ……こんなことは言いたくないんだが……君がああいう職にたずさわっている人とききあうことは、たちまち君自身のマイナスになるんだ。気をつけなくちやいけない。……煩さいんだ、実にね……」

そういいながら煙草を口にくわえた勝則は、真知子がつけて出すマッチの火に顔を近づけながら、

「これで、この旅行が終つて東京へ帰るね……すると、僕は君を連れて、僕の上役達の家庭を一軒一軒挨拶まわりするんだが、その上役連中の奥さんがたの君に対する印象が忽ちその良人達を通して僕にふりかかつてくる……みんな

おとなだからね……怖いよ。だが、その……つまり社交だな……それは絶対に避けたり逃げたりは出来ないものなんだ。うまくやつて貰わなくちや困る……何かあると、直ぐに、その連中の噂のまとなるんだからな……その場合にだ……ほら、昨夜のあの女、ああいう女性と君がつきあつていると、実に具合が悪いんだよ」

「あの人が……お綾さんが、どんなにいい人でも……でしようか」

「あの人がいい人だつてことを知つてるのは、君だけなんだよ。他の人には、いい人か悪い人か判りやしないんだ……つきあつていない人達は外見だけで判断するより仕方がないんだからな……そうだろう」

勝則は、最後の言葉を真知子に強く押しつけるように言つた。

「僕達夫婦は幸福にならなくてはならないんだからね……判るだらう」

真知子はそんな風に思われた綾を気の毒だと思つたし、